

日本語授業における使用言語と授業担当教師についての意識調査

— エルジェス大学 (トルコ) でのアンケート調査をもとに —

(Untersuchungsbericht zu den Lehrern und zur Vermittlungssprache der Lehrer im japanischen Sprachunterricht: Aufgrund einer Umfrage an der Universität Erciyes in der Türkei)

朽方修一 Kuchikata, Shuichi・新谷知佳 Shintani, Chika・ニハンカラ Nihan, Kara (エルジェス大学、トルコ Universität Erciyes, Türkei)

要旨/Zusammenfassung

本研究では、エルジェス大学 (トルコ) で日本語を主専攻として学ぶ 76 名の学生を対象に、日本語授業での使用言語および授業担当教師について、学生がどのような希望をもっているかを探るためにアンケートを行い、調査した。アンケート結果から、使用言語については、日本人教師に日本語の使用を望む学生が 72 名 (95%)、トルコ人教師にも日本語の使用を望む学生が 33 名 (43%) おり、可能な限り多く日本語に触れる機会を望んでいることが明らかになった。また、担当教師については、日本人教師に「文法演習」、「漢字」、「会話」の授業を、トルコ人教師に「文法基礎」、「聴解」、「作文」、「読解」の授業を担当してもらいたいと思っていることが明らかになった。以上明らかになった学生の要望に応え、1、2 年生を対象に開講される「文法基礎」および「文法演習」の授業を中心に担当教師の見直しを行った。

Die vorliegende Arbeit ist ein Untersuchungsbericht zu den Lehrern und zur Vermittlungssprache der Lehrer im japanischen Sprachunterricht an der Universität Erciyes in der Türkei. Die Untersuchung wurde aufgrund einer Umfrage vorgenommen, an der 76 Studenten, die Japanisch als Hauptfach studieren, teilnahmen. Die Umfrage hat ergeben, dass die Studenten sich sowohl von den japanisch-muttersprachlichen Lehrern (95% der befragten Studenten = 72 Studenten) als auch von den türkisch-muttersprachlichen Lehrern (43% der befragten Studenten = 33 Studenten) wünschen, dass Japanisch als Unterrichtssprache verwendet wird. Außerdem hat die Umfrage deutlich gemacht, dass die Studenten von den japanisch-muttersprachlichen Lehrern verlangen, dass diese den Unterricht in „Übung der Grammatik“, „Kanji“ und „Konversation“ übernehmen, und von den türkisch-muttersprachlichen Leh-

ren, dass diese Unterricht zu den Themen „Einführung in die Grammatik“, „Hörverständnis“, „Leseverständnis“ und „Aufsatz“ übernehmen. Basierend auf den obigen Ergebnissen wurden die entsprechenden Lehrer beauftragt, die „Einführung in die Grammatik“ und „Übung der Grammatik“ für die Studenten im 1. bis zum 4. Semester zu unterrichten.

1 はじめに

本研究は、エルジェス大学文学部日本語・日本文学科(トルコ)において、主専攻として日本語を学ぶ学生の要望を把握するために行ったアンケート調査の報告である。アンケートは、76名の学生を対象に、日本語授業での教師の使用言語と授業担当教師について、どのような希望をもっているかを探ることを目的とし、行った。これは、これまで授業に関して、学生を対象とした大規模な調査を行ったことがなく、可能な限り学生の声を授業に反映させたいと教師が感じていることが動機となっている。アンケート結果から、使用言語については、日本人教師に日本語の使用を望む学生が72名(95%)、トルコ人教師にも日本語の使用を望む学生が33名(43%)と多く存在し、授業内で可能な限り多く日本語に触れ、日本語で日本語を学ぼうとする姿勢が明らかになった。また、希望担当教師については、日本人教師に「文法演習」、「漢字」、「会話」の授業を、トルコ人教師に「文法基礎」、「聴解」、「作文」、「読解」の授業を担当してもらいたいと考えていることが明らかになった。そこで、1、2年生を対象に行われる「文法基礎」および「文法演習」の授業を中心に、学生の要望に応じ全授業の担当教師の調整を行った。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で媒介語を使用した授業の長所と短所について、先行研究に基づき確認する。また、本研究における媒介語の定義について述べる。次に3節で、調査を行ったエルジェス大学文学部日本語・日本文学科における日本語教育事情について概観する。そして、4節でアンケート調査の概要と結果について示し、5節で本研究のまとめとアンケート結果に基づき行った授業への反映について述べる。最後に6節で今後の課題について触れる。

2 先行研究と媒介語の定義

2.1 媒介語使用に関する先行研究

日本語授業における媒介語の使用に関しては、伊藤[1989]、川本[1992]、石田[1996]などが取り上げている。特に川本[1992]には、媒介語を使用した授業の「長所」と「短所もしくは注意すべき点」がまとめられているため、以下に部分的に引用する。

(1) 長所

- ① 正確な説明が可能
- ② 説明が容易
- ③ 準備が簡単
- ④ 教具が少なくすむ
- ⑤ 教師と共通言語があることが分かると、学習者は安心感と教師に対して親しみとを感じることもある

(2) 短所もしくは注意すべき点

- ① 日本語と媒介語との間に意味のずれがある
- ② 日本語に接する時間が少なくなってしまう
- ③ 学習者は、教師の説明を受けて理解するという受動的な理解を常にするようになる
- ④ 絵や動作を使用せずに、媒介語で説明する授業は変化に乏しく、単調になりやすく、学習者は緊張感を維持しにくくなってしまう
- ⑤ 授業に対する教師の準備が不十分になる傾向がある

[川本 1992: 32-33]

2.2 本研究における媒介語

媒介語は学習者の母語または理解可能な言語と定義されるが、エルジェス大学における日本語授業での媒介語は、トルコ人教師の場合は「トルコ語」、日本人教師の場合は「トルコ語」、「英語」である。つまり、日本人教師はトルコ語能力が十分でないため、媒介語を使用しなければならない際は、英語を使用することもあるということである。

なお、本研究では「トルコ人教師」、「日本人教師」という語を使用しているが、それぞれ「トルコ語を母語とする教師」、「日本語を母語とする教師」と同義である。

3 エルジェス大学文学部日本語・日本文学科の概要

具体的な調査について述べる前に、本節ではエルジェス大学文学部日本語・日本文学科における日本語教育事情について概観しておきたい。

3.1 日本語・日本文学科の沿革

エルジェス大学は 1978 年に国立大学としてトルコ中央に位置する都市カイセリに設立され、日本語・日本文学科は 1994 年に、アンカラ大学、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学に次いでトルコで 3 番目の日本語を主専攻とする学科として開設され

た。カイセリは人口 100 万人を超える大都市ではあるが、外国人はきわめて少なく、日本人もエルジェス大学で日本語を教えている 2 名だけかと思われる。

3.2 教師

2016 年 12 月現在、教師数はトルコ人教師 5 名 (うちアシスタント 1 名)、日本人教師 2 名の計 7 名である。アシスタントは基本的に授業を行わないため、実質 6 名の教師が授業を行っている。日本人教師の採用条件としては、日本語教育に関する知識、日本語教授経験が重視される一方、トルコ語能力は求められていない¹。これは、日本国内ではトルコ語はマイナーな言語であり、トルコ語能力と日本語教育の知識・経験の両方を満たす日本人教師を確保するのが困難であるためである。したがって、日本人教師は基本的に日本語だけを使用した直接法で授業を行っている。カイセリでは日本人と出会う機会がほとんどないため、日本人教師には、学生が可能な限り生の日本語に触れる機会が多くなるように授業外でも学生と積極的に接することが望まれている。

3.3 学生

学生は学科開設以来毎年受け入れており、ここ数年は毎年およそ 35 名が入学している²。基本的にすべてトルコ人 (トルコ語母語話者) で、まれに数名の外国人留学生も入学する。彼らはアゼルバイジャンやトルクメニスタンなどの近隣諸国からの留学生であり、入学時に十分なトルコ語能力を持つ学生である。近年ではアニメやマンガに興味を持つ学生が多く、入学前から日本語に触れている場合が多い。

3.4 授業

授業は、毎年 9 月から翌年 1 月の冬学期と 2 月から 6 月の春学期の 2 学期間に行われる。学期期間には中間試験、期末試験、再試験の期間も含まれているため、授業期間は実質それぞれ 13 週となっている。授業はすべて必修で、選択科目は開講されていない。また、現代日本語の授業のみで、古典・漢文の授業は行われていない。基本的に日本語を学ぶことがメインであるが、

1 一般に、採用に際し日本人教師にもドイツ語能力が求められるドイツ語圏の大学とは異なる状況かと思われる。

2 本学科の定員は毎年およそ 35 名である。トルコでは、全ての大学入学希望者は「学生選抜配置試験」(Öğrenci Seçme ve Yerleştirme Sınavı)を受験し、点数に応じて希望の大学・学部に入学できるかが決まる。受験者は最大第 24 志望まで選ぶことができるため、本学科を希望する者が全体でどのくらいいるのかは明らかではない。

ここ数年カリキュラムの見直しが行われ、3、4年生の授業では特に文学に関する専門的な授業が行われるようになった(表3、表4参照)。また、担当授業に関してだが、トルコ人教師は役職によって最低授業担当数が決まっているため、カリキュラムの改定、トルコ人教師の増減や昇進などにより、毎学期同じ教師が同じ授業を担当できるとは限らない。

下記の表1から表4は、2016年9月から2017年1月の冬学期の各学年の時間割である。授業は1コマ90分で行われ、1、2年生では日本語の4技能を学ぶ授業が中心となっている。詳細は5.3で述べるが、下記の時間割は今回のアンケート調査の結果を反映させ、1、2年生対象の「文法基礎」と「文法演習」の授業をそれぞれトルコ人教師、日本人教師が担当できるよう学科全体の担当授業を調整したものである。

表1 1年生の時間割

授業名	授業コマ数/週	担当教師
文法基礎	2	トルコ人教師
文法演習	2	日本人教師
漢字	2	日本人教師
会話	1	日本人教師
聴解	1	トルコ人教師
日本文化入門	1	トルコ人教師

表2 2年生の時間割

授業名	授業コマ数/週	担当教師
文法基礎	2	トルコ人教師
文法演習	2	日本人教師
漢字	2	トルコ人教師
会話	1	日本人教師
聴解	1	トルコ人教師
作文	1	日本人教師
読解	1	トルコ人教師

表3 3年生の時間割

授業名	授業コマ数/週	担当教師
文法演習	1	トルコ人教師
日本語表現演習	1	トルコ人教師
漢字	1	トルコ人教師
会話	1	日本人教師
聴解	1	トルコ人教師
作文	1	日本人教師
メディア演習	1	トルコ人教師
日本文学入門	1	トルコ人教師

表4 4年生の時間割

授業名	授業コマ数/週	担当教師
日本文学	2	トルコ人教師
詩・俳句・短歌	1	トルコ人教師
研究方法入門	1	トルコ人教師
会話	1	日本人教師
漢字	1	トルコ人教師
敬語	1	トルコ人教師
翻訳演習	1	トルコ人教師
卒業論文指導	1	トルコ人教師

3.5 留学

2016年12月現在、エルジェス大学と提携している日本の大学は、大阪国際大学と宮崎大学の2校のみである。大阪国際大学へは毎年1名が留学しており、宮崎大学への留学は2017年10月より開始する予定である。しかし、いずれにしても経済的な理由により、日本に留学できる学生はかなり限られているのが現状である。日本からの留学生は、大阪国際大学から短期間の研修生を受け入れているが、ここ数年トルコの治安情勢の悪化等により実現できていない。日本ではトルコ語を学ぶことができる大学が少ないことなどから、トルコに留学を希望する日本人学生もそれほど多くないと思われ、エルジェス大学ではこれまで大阪国際大学以外からの日本人学生を受け入れたことがない。したがって、エルジェス大学の学生が同年代の日本人と直接接し、日本語でコミュニケーションする機会はきわめて少ない。

4 調査と考察

4.1 調査の目的

本調査は以下の2点を目的とし、行った。

- [1] 日本語授業での使用言語、各授業の担当教師について学生の要望を把握する。
- [2] [1]の結果を踏まえ、担当教師をどう調整すればよいか検討し、反映させる。

エルジェス大学で日本語を学ぶ学生は、どの言語を通じて日本語を学びたいのか、また、日本人教師およびトルコ人教師にどの授業を担当してほしいのかを明らかにし、学生の要望を確認したうえで、授業を担当する教師の調整を行いたい。

4.2 調査対象と内容

今回の調査は、2015年12月21日から25日にかけて行ったアンケートに基づくものである。アンケートは当時エルジェス大学文学部日本語・日本文学科に在籍していた1年生から4年生までの計76名を対象として行われた。アンケートは全学生が理解できるようにトルコ語で作成し、回答は日本語でもトルコ語でも可とした。

調査内容は大きく以下の2つである。

- 〈1〉日本語授業での日本人教師およびトルコ人教師の使用言語について
- 〈2〉日本語授業の担当教師について

〈1〉の日本語授業での使用言語については、日本人教師およびトルコ人教師それぞれについて、授業で日本語、トルコ語、英語のいずれの言語を使用してほしいかについて問い、その理由も書いてもらった。〈2〉の日本語授業の担当教師については、主に1、2年生の授業で行われる「文法基礎」、「文法演習」、「漢字」、「聴解」、「会話」、「作文」、「読解」のそれぞれの授業において、日本人教師とトルコ人教師のどちらに授業をしてもらいたいかを問い、その理由を書いてもらった。

なお、表1から表4の時間割に見られるように、「日本文学」や「日本文化」などの授業も行われているが、これらの専門科目は現段階で日本人教師が担当する予定がないため今回の調査では対象としなかった。別の機会に専門科目についても学生の要望を把握したい。

4.3 調査結果

4.3.1 授業内での使用言語について

まず、日本語授業において日本人教師およびトルコ人教師にどの言語を使用してほしいかについて、全学年のアンケート結果を見ていきたい。

表5 日本人教師に使用してほしい言語

希望使用言語	人数	%
日本語のみ	58	76
トルコ語のみ	2	3
英語のみ	0	0
日本語&トルコ語	6	8
日本語&英語	4	5
トルコ語&英語	1	1
日本語&トルコ語&英語	4	5
無回答	1	1
計	76	100

表6 トルコ人教師に使用してほしい言語

希望使用言語	人数	%
日本語のみ	11	14
トルコ語のみ	42	55
英語のみ	0	0
日本語&トルコ語	22	29
日本語&英語	0	0
トルコ語&英語	0	0
日本語&トルコ語&英語	0	0
無回答	1	1
計	76	100

全学年の総計では、日本人教師に日本語の使用を求める学生が全体で72名(95%)、そのうち日本語のみの使用を望む学生が58名(76%)と最も多かった(表5参照)。その理由として、「日本語を聞けば聞くほどいいと思う」、「日本語に慣れることができる」、「日本語が上手になるのが早くなる」、「日本人教師は日本語以外の言語を使う必要がない」、「日本語を勉強しに来たから、わからなくても日本語がいい」、「語彙が増えて発音が上手くなる」といった回答があった。

一方、トルコ人教師にはトルコ語の使用を求める学生が全体で64名(84%)、そのうちトルコ語のみの使用を望む学生が42名(55%)と最も多かった(表6参照)。その理由として、「日本語だけではわからないことをトルコ語で学びたい」、「最初はトルコ語、そのあと日本語がいい」、「文法などは最初日本語だとわからない」、「日本人教師が日本語を使うから、トルコ人教師は日本語を話す必要がない」、「トルコ人教師なら、トルコ語で質問できる」といった回答があった。

ただし、トルコ人教師にも日本語の使用を望む学習者が全体で33名(43%)、そのうち日本語のみの使用を望む学生が11名(14%)いたため、その理由も見ておきたい。トルコ人教師に日本語のみ、あるいは日本語&トルコ語の使用を望むと回答した学生の理由は、「トルコ人教師が多いから、日本語を練習する機会がない」、「わからないことでも簡単な日本語で説明してくれたらもっと上手になると思う」、「必要なときやわからないときだけトルコ語で、あとは日本語がいい」などであった。日本人が非常に少ない環境で学ぶ学生が、できる限り多く日本語に触れ、使用することを望んでいることが読み取れる。

日本人教師には日本語のみ、トルコ人教師にはトルコ語のみの使用を望む学生が最も多いが、日本語とトルコ語の併用を望む学生もかなりいることがわかった。

4.3.2 授業の担当教師について

続いて、それぞれの授業の担当教師の希望について尋ねた問の結果を見ていきたい。今回の調査では、各授業の担当教師について学生の要望を把握し、中でもすべての授業の基礎となる「文法基礎」と「文法演習」の授業については重点的に考察を行った。「文法基礎」と「文法演習」の授業については、全学年と学年別の結果を詳しく見ていきたい。

はじめに「漢字」、「聴解」、「会話」、「作文」、「読解」の授業についての全学年の結果を表7から表11に示す。1年生の授業では「読解」および「作文」の授業が行われなかったため、1年生には将来授業に参加する際に日本人教師とトルコ人教師のどちらに担当してほしいか考えて回答してもらった。2年生から4年生までは自分の経験を振り返って回答してもらった。

表7 「漢字」授業の希望担当教師

希望担当教師	人数	%
日本人教師	58	76
トルコ人教師	7	9
どちらでも可	8	11
無回答	3	4
計	76	100

表8 「聴解」授業の希望担当教師

希望担当教師	人数	%
日本人教師	13	17
トルコ人教師	49	64
どちらでも可	8	11
無回答	6	8
計	76	100

表9 「会話」授業の希望担当教師

希望担当教師	人数	%
日本人教師	74	97
トルコ人教師	2	3
どちらでも可	0	0
無回答	0	0
計	76	100

表10 「作文」授業の希望担当教師

希望担当教師	人数	%
日本人教師	21	28
トルコ人教師	44	58
どちらでも可	4	5
無回答	7	9
計	76	100

表 11 「読解」授業の希望担当教師

希望担当教師	人数	%
日本人教師	11	14
トルコ人教師	57	75
どちらでも可	0	0
無回答	8	11
計	76	100

「漢字」の授業では 58 名 (76%)、「会話」の授業では 74 名 (97%) の学生が日本人教師による授業を望んでおり (表 7、表 9 参照)、「聴解」の授業では 49 名 (64%)、「読解」の授業では 57 名 (75%) の学生がトルコ人教師による授業を望んでいることが明らかになった (表 8、表 11 参照)。「作文」の授業では、教師の予想に反し、日本人教師による授業を望んでいる学生が 21 名 (28%) であるのに対し、トルコ人教師による授業を望んでいる学生が 44 名 (58%) であった (表 10 参照)。トルコ人教師による「作文」の授業を望む理由として、「文を書くときトルコ語で考えるので、対応する日本語の語彙や表現をトルコ語で教えてほしい」、「間違いをトルコ語で説明してくれたほうがわかりやすい」などが挙げられた。担当教師を決定する際は上記の点も考慮したほうがよいと思われる。

次に、「文法基礎」と「文法演習」の授業の希望担当教師について学年別の結果とともに見ていきたい。原則として「文法基礎」の授業では初出の文法項目の導入、説明が行われ、「文法演習」の授業では既習の文法項目を使った応用練習が行われる。この 2 つの授業は、1、2 年生では週に 2 コマ (180 分) ずつ行われており (表 1、表 2 参照)、他の授業の基礎ともなる重要な授業と位置づけられている。

表 12 「文法基礎」授業の希望担当教師

希望担当教師	全学年		1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
日本人教師	12	16	2	7	7	32	2	20	1	6
トルコ人教師	64	84	26	93	15	68	8	80	15	94
どちらでも可	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	76	100	28	100	22	100	10	100	16	100

表 13 「文法演習」授業の希望担当教師

希望担当教師	全学年		1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
日本人教師	51	67	20	71	9	41	8	80	14	88
トルコ人教師	24	32	8	29	13	59	2	20	1	6
どちらでも可	1	1	0	0	0	0	0	0	1	6
計	76	100	28	100	22	100	10	100	16	100

「文法基礎」の授業においては学年ごとの違いは見られず、いずれの学年においても日本人教師よりもトルコ人教師による授業を望んでいる学生の数のほうが多い(表 12 参照)。一方、「文法演習」の授業においては、1 年生、3 年生、4 年生はトルコ人教師よりも日本人教師による授業を望んでいる学生の数のほうが多いが、2 年生については僅かながら日本人教師よりもトルコ人教師による授業を望んでいる学生の数のほうが多い(表 13 参照)。

では、「文法基礎」と「文法演習」の授業はそれぞれどちらの教師が担当するのがよいのだろうか。教師の組み合わせについて学生の希望をまとめたものを表 14 に提示する。

表 14 「文法基礎」と「文法演習」授業の希望担当教師の組み合わせ

文法基礎の担当教師	文法演習の担当教師	人数	%
トルコ人教師	日本人教師	50	66
トルコ人教師	トルコ人教師	13	17
日本人教師	トルコ人教師	11	14
日本人教師	日本人教師	1	1
トルコ人教師	どちらでも可	1	1
	計	76	100

最も希望が多いのは、「文法基礎」の授業をトルコ人教師、「文法演習」の授業を日本人教師が担当するという組み合わせである(50 名、66%)。「文法基礎」の授業はトルコ人教師のほうがよいとする理由として、「新しい文型を勉強する時トルコ語の説明があったほうがいい」、「全部日本語だと、分からなくなる」、「トルコ人教師はトルコ語の意味も説明してくれる」といった回答が見られた。「文法演習」の授業は日本人教師のほうがよいとする理由として、「間違っていたら日本人教師はすぐに直してくれる」、「練習する時発音も上達する」などが挙げられる。また、この組み合わせがよいとする理由として、「トルコ語で意味が分かってから、日本人教師の授業で練習したほうがいい」などがあった。

次に希望が多いのは、「文法基礎」、「文法演習」のどちらの授業もトルコ人教師の組み合わせで、13 名(17%)の学生が望んでいる。その理由として、「日本語は難しい言語だから」、「トルコ人教師はトルコ語と比較しながら説明してくれてわかりやすい」、「日本人教師はトルコ語が分からず質問できない」、「日本人教師は、間違った時すぐに直してくれるが、自分がどうして間違ったか聞くことができない」などであった。

「文法基礎」の授業を日本人教師、「文法演習」の授業をトルコ人教師が担当するという組み合わせは 11 名(14%)であった。「文法基礎」の授業は日本人教師のほうがよいとする理由として、「新しい文型は母語話者である日本人教師から学んだほう

がいい」、「日本語は日本人教師の母語で、日本人教師のほうが説明がわかりやすい」などがあつた。また、この組み合わせのほうがよいとする理由として、「日本人教師から学んでトルコ人教師と練習すると、頭に残る」という回答があつた。

「文法基礎」、「文法演習」のどちらの授業も日本人教師のほうがよいとする組み合わせと「文法基礎」の授業はトルコ人教師、「文法演習」の授業はトルコ人教師と日本人教師のどちらでもよいという組み合わせはそれぞれ1名ずつであつた。前者の組み合わせの回答には理由の記述がなく、後者の組み合わせの回答では、「文法基礎」の授業でトルコ人教師を望む理由として、「1、2年生のとき、わからなければトルコ語で説明してほしいから」、「文法演習」の授業でトルコ人教師と日本人教師のどちらでもよいとした理由は「説明はトルコ語、練習のときは日本語ならわかりやすくなる」であつた。

5 本研究のまとめ

今回の調査を通じて、日本語授業での日本人教師およびトルコ人教師の使用言語について学生が期待していること、日本語授業の担当教師について学生が期待していることが明らかになった。以下、使用言語、担当授業それぞれについてまとめたい。

5.1 使用言語について

アンケート調査により、日本語授業で日本人教師およびトルコ人教師にどの言語を使用してほしいかが明らかになった。どちらの教師にもそれぞれの母語の使用を望む学生が最も多かったが、トルコ人教師にも日本語のみを使用してほしい、トルコ語と合わせて日本語も使用してほしいと回答した学生も見られた(4.3.1 参照)。これは、エルジェス大学のあるカイセリには日本人が少ないため、実際に日本語を使用する機会が少なく、授業で可能な限り多く日本語に触れる機会を求めていることの表れだろう。トルコ人教師は、学生の要望を考慮し、日本語を使用して授業を行っていく必要がある。

5.2 担当授業について

今回の調査では、各授業の担当教師の希望についても答えてもらった。その結果、日本人教師が「文法演習」、「漢字」、「会話」の授業を、トルコ人教師が「文法基礎」、「聴解」、「作文」、「読解」の授業を担当することを学生が望んでいることが明らかになった。1、2年生の授業では特に「文法基礎」と「文法演習」の授業が重要視されているため、この2つの授業に注目し、担当教師についての希望と理由を問うた結果、

「文法基礎」の授業はトルコ人教師、「文法演習」の授業は日本人教師が担当するという組み合わせを最も多くの学生が望んでいることが明らかになった(4.3.2 参照)。

5.3 授業への反映

以上の結果を踏まえ、可能な範囲で担当教師の調整を行った。3.4 に掲載した表1から表4の時間割は、今回の調査結果を反映させたものである。まず1年生、2年生の「文法基礎」、「文法演習」の授業を優先し、学生の要望通りそれぞれトルコ人教師、日本人教師が担当することにした。また、1年生から4年生までの「会話」、1年生から3年生までの「聴解」、2年生の「読解」の授業も学生の要望通り調整することができた。これらの授業については日本人教師およびトルコ人教師の考えとも一致している。

しかし、「作文」と「漢字」の授業については、教師同士に意見の違いがあり、まずその調整を行った。「作文」の授業については、日本人教師から、アンケート結果を考慮して「特に2年生対象の作文授業は間違いや対応する表現などについてトルコ語で説明しながら行ったほうが効果的だ」という意見が出されたが、トルコ人教師から「学生の書いた日本語を正しくチェックするためには日本人教師のほうがいい」という意見が出、最終的にすべて日本人教師が担当するほうがよいということになった。また、「漢字」の授業については、日本人教師からの「初級段階の漢字はトルコ語で対応する意味を示しながら教えたほうが簡単でわかりやすいので、トルコ人教師がよい」という意見も出たが、学生の要望に加え、トルコ人教師からも「正しく、きれいに書いて教えられるか不安だ」、「最初の段階から正しくきれいに書けるようにしたほうがいい」という意見があり、一旦は、日本人教師が担当するほうがよいという結論になった。しかし、日本人教師がすべての「漢字」の授業を担当することになると、トルコ人教師の授業数が、3.4で触れた、最低担当授業数を満たさなくなる恐れがあった。そこで、1年生の「漢字」の授業は日本人教師が、2年生から4年生までの「漢字」の授業はトルコ人教師が担当することとなった。「作文」と「漢字」の授業については、学生および教師全員の希望を十分に反映させることができなかった。

6. おわりに

本研究は、トルコ・エルジェス大学での日本語授業における使用言語と授業担当教師について、学生がどう意識しているのかをアンケート調査により明らかすること、また、その結果を

可能な限り授業に反映させることを目的とした。したがって、日本人教師とトルコ人教師がどのように連携して授業を行う必要があるのか、という部分にまでは触れることができなかった。また、「作文」などトルコ語ができないとうまく教えることができない領域を、日本人教師は日本語だけでどのように指導していくか、などについても考える必要がある。今後の課題としたい。

本研究はトルコの大学での調査に基づくものではあるが、現地語が十分にできない日本人教師に求められる役割と、現地の教師と協力して指導を行う際の問題点を示す一例として位置づけられる。

【参考文献】

- 石田敏子 1996. 『改訂新版 日本語教授法』 2版 大修館書店, 東京, 22-25.
- 伊藤芳照 1989. 「8 対象別・母語別の指導法」 木村宗男ほか (編) 『日本語教授法』 おうふう, 東京, 199-212.
- 川本喬 1992. 「ケース4 直接法」 岡崎敏雄ほか (編) 『ケーススタディ 日本語教育』 桜楓社, 東京, 30-36.